

PCP

PRIMARY
CARE
PHYSICIANS

53



くどうちあき脳神経外科クリニック

東京都大田区

言葉という「メス」を使って
患者さんの心の門を開く

当院は、脳神経外科、心療内科、神経内
科、整形外科を標榜科に掲げているが、
本当は、「こころの外科」「たましい外科」
を標榜したい。

メスや薬で治療するだけでは、患者さ
んが本当に癒されることはないと感じて
いる。患者さんに寄り添い、目と目を合わ
せて患者さんの「話を聞いてほしい」とい
う思いを受け止める。そうすると、心によ
うな思いが噴き出してくる。そうな
らうことで、本当に「治った」と言えるのでは
ないかと考えているからだ。

言葉というメスで患者さんの心の門を
開く。「こころの外科」、「たましい外科」と
はそういう意味である。

このような思いは、勤務医時代の経験
から生まれたものだ。大学病院の脳外科
に勤務していた当時、手術を受ける患者
さんの不安におののく姿や、術後に今後
の不安を抱えながら痛みを耐える姿を見
てきた。当時、医師が病棟に行くことはほ
うどなく、患者さんやご家族との緊密
なコミュニケーションは少なかった。

僕らの切実な声に接したのは、廊下で
待ち話や電話での問い合わせなど、い
わゆる「正規ルート」以外である。そのな
かで、「十分にコミュニケーションを取っ
て不安を取り除ける医師でありたい」と

いう思いを抱いた。

患者さんの苦しいときに、いつもその
人の心の支えとなって傍らにいたい。そ
う考えたのが、当院を開業した最大の理
由である。

「心の穴」を埋める補完療法

診療には、東洋医学をはじめ、アロマセ
ラピーやリフレクソロジー、ヨーガセラ
ピーなど、いわゆる「補完代替医療」と呼
ばれるものも取り入れている。

これまで、脳外科医として西洋医学の
最先端の脳外科手術を手がけ、研鑽を積
んできたが、われわれの手術では、患者さ
んやご家族の不安といった「心の穴」まで
埋めることができない。東洋医学や補完
代替医療は、この「心の穴」を埋めるうえ
で有効であることが見込まれた。ただし、
それらが西洋医学に取って代わるもので
はないことも理解している。どちらにも限
界があり、また良いところがある。両方
を使うことで良い効果が期待できるなら
ば、優劣をつけず、すべて同じ治療とい
うスタンスである。

例えば、うつ病の患者さんには、抗うつ
薬も投与するが、自室にリラックスできる

香りを置くことも勧める。抗うつ薬で副作
用が出た場合は、漢方薬で対処する。うつ
病の人は身体がこわばり、肩こりを訴える
ことも多いため、リフレクソロジーやヨー
ガを取り入れてもらう——などだ。

そのうえで、とことん話を聞く。そうす
ることで、当初泣きっ放しで話もできな
かった人が、2〜3ヵ月後はニコニコなが
ら診察室に入ってくるようになる。

もっと患者さんと話をしたいが、時間
がないことが悩みだ。患者さんだけでなく、
そのご家族ともコミュニケーションを取っ
ていきたい。患者さんを支えるのはご家
族であり、ご家族しか持っていない情報、
気がつかないこともたくさんある。診療
以外の時間を使って、コミュニケーション
を深めていきたいと考えている。

また、補完代替医療についての科学的
エビデンスもつくっていく。これだけさま
ざまな医療情報が氾濫していると、患者
さんやご家族は何が自分に向いている治
療なのかかわからず迷ってしまう。当院の経
験をもとに、本当に良いものをピックアップ
し、必要な情報を整理し提供していくこ
とが、患者さんやご家族の水先案内人
としての私の使命だと考える。

DOCTOR'S PROFILE

1985年、島根大学医学部卒業。鹿児島
市立病院脳疾患救命救急センターにて
研修後、東邦大学大学院基礎形態系修
了。英国バーミンガム大学脳外科、東京
労災病院脳神経外科副部長を経て、
2001年に開業。病気を治すだけでなく、
脳と心に迫る医療をもって森のよう
な「癒しの場」でありたいと考える。

くどう ちあき
院長 工藤 千秋 先生



待合室の壁に描かれたフレスコ画「ちあきの森」。待合室も癒しの空間にしたいという、工藤先生の思いが込められている



診察室の天井に設けられた天使のドーム。気持ち沈んでいる患者さんに、「上を見上げてごらん」と指差し、励ますこともある



リラックスしながら点滴が受けられるよう、リクライニングソファが備えられた3つの点滴室には、それぞれテーマがある。写真は「天使の部屋」